

第3回 世界のアレルギー

石塚 隆記 (市民研・理事)

私はスギ花粉症である。小学校高学年頃に発症して、その後毎年春先になると、くしゃみしたり、目がかゆくなったりと、花粉症の症状が現れている。大人になってから耳鼻科でパッチテスト（腕にアレルギーを注射して反応するか見るテスト）をしてみたが、スギ花粉のアレルギーにしっかり反応し、医者から「間違いなくスギ花粉症です」と診断されたから間違いのないだろう。

「なぜ、私がスギ花粉症にならないといけないの？」という思いは今でもある。それで、「どうすれば治るの？」という思いもある。このような疑問を起点に意識の半径を少しだけ広げてみて、世界のアレルギー事情がどうなっているのか見てみた。調べた資料は、世界アレルギー機構（World Allergy Organization, WAO）という組織が出版している「WAOのアレルギーに関する白書、2013年版」（注参照）。今回の原稿では、この白書に書いてあることの要旨（「1.確認されている現象」、「2.対策」）を以下にピックアップしたあとで、じゃっかんの考察を書こうと思う。

1. 確認されている現象

- いわゆる西洋の国々において、1960年代前半から1970年代にかけて、喘息患者数の急増が確認された。一方、現在、これら西洋の国々では喘息患者数は増加も減少もしないプラトー（時間軸に対する患者数の変化率がほぼゼロ）の状態であるのに対して、社会が西洋化しつつある新興国では喘息患者数の増加が確認されている。全世界での喘息患者数は推定3億人。
- 全世界で、2.4億人から5.5億人が食物アレルギーで苦しんでいる。
- 全世界で、アトピー性皮膚炎の患者数は増加の一途をたどっている。過去30年間で、都会に住む人のアレルギー性皮膚炎の罹患率は2から3倍に増加。アレルギー性皮膚炎の患者数は居住地により異なり、田舎では都会に比べて、圧倒的に患者数が低い。
- アレルギー性鼻炎の全世界の患者数は推定4億人。この数字は増加傾向にある。

2. 対策

- アレルギー対策は4段階に別れる。第1ステップは両親の教育。第2ステップはアレルギーを避ける。第3ステップは薬による対処療法。最終ステップは免疫療法。

ここまで、読んでいただいた方は、どう思われたでしょうか？私は、調べている最中に悲しくなりました。都市に生活することによりアレルギーの罹患率が高まる。対策の第5段階目に「生活環境を変える」といった項目がないことも残念だった。

結局、この世界のアレルギー問題というのは、環境問題が顕在化している最も代表的な例の一つと言える。産業活動が進むことにより、われわれの身近な環境の生物多様性は失われ、口にする食物には合成化学薬品が混じるようになった。日常的に電磁波にさらされるようになった。都市部の大気にはわけがわからない化学物質が含まれるようになった。どれが原因なのかわからないが、総体的に、生活水準が向上することに反比例して、アレルギーで苦しむ人が増えている。

市民研として何が出来るか？分からない。分からないから、こうやって情報を発信して、これを読む方たちと問題を共有し、「何が出来るか？」を考えることをやめないようにしたい。

【注】

WAOの『アレルギー白書』は以下のサイトからダウンロードできる。

[2011 White Book on Allergy \(2013 Updates\)](#)

日本語訳は、日本アレルギー学会が発行している『アレルギー』の次の号に

『アレルギー』60(5), 614-628, 2011-05

「WAO 情報 世界アレルギー機構(WAO)アレルギー白書 要旨」として

[Executive Summary のみの翻訳](#)が掲載されているが、

不思議なことに、この翻訳論文だけが[雑誌アーカイブスのページ](#)では公開されていない。

